ISSN 2186-7259

Aug. 2014

# ZENBI

全国美術館会議機関誌

August 2014 [Vol.6]

Vol.6

# デジタル高精細撮影への転換
# 4″×5″から無限大へ。

## NISSHA はデジタル高精細撮影の無限の可能性を追及しています

従来の「4×5」ポジフィルムよりも高解像度なのにリーズナブル。
印刷用に画像分解する必要もなく、また色褪せることもありません。

最大 28 億画素までデータ活用にあった仕様で撮影
赤外線高精細デジタル撮影が可能
豊富な国宝・重要文化財のデジタルアーカイブ実績
文化財、美術品のあるところどこでも出張撮影

Trend Meets Technology

NISSHA

日本写真印刷株式会社 情報コミュニケーション事業部

東京都港区芝 5-33-7　徳栄ビル本館　TEL : 03-6414-7300　担当 : 梅澤
京都市中京区壬生花井町 3　TEL : 075-823-5152　担当 : 中上

CONTENTS


ブロック報告

［北海道］ 冬ニモ負ケズ―学芸員のネットワーク　地家光二 ● 2

［東　北］ 震災から3年　佐藤秀彦 ● 4

［関　東］ 足元を見つめて　染谷 滋 ● 6

［東　京］「レガシー」を見据えて―2020東京オリンピック文化プログラム―　岡部友子 ● 8

［北信越］ 30年後の第二次美術館建設ラッシュ　橋本文良 ● 10

［東　海］ 作品の最適化をはかる　中村史子 ● 12

［近　畿］ 現代美術コレクションの保存／美術館の未来　牧口千夏 ● 14

［中　国］「美術」をほぐしていく美術　三浦 努 ● 16

［四　国］ リエゾン（かけはし）としてのアート―四国こどもとおとなの医療センターをたずねて　牧野裕二 ● 18

［九　州］ 変わらずに在るために変わってゆくこと、風を呼ぶこと　竹口浩司 ● 20

新規会員館紹介

福島美術館 ● 22

愛知県陶磁美術館 ● 23

上田市立美術館 ● 24

富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館 ● 25

林原美術館 ● 26

CCGA現代グラフィックアートセンター ● 27

小林古径記念美術館 ● 28

あべのハルカス美術館 ● 29

賛助会員各社　30

事務局から　31

編集後記　33

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定　35



ISSN 2186-7259

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.6　2014年8月1日発行 ©全国美術館会議

［編集］ 全国美術館会議機関誌部会　編集幹事　尾崎信一郎　松山利光

［発行者］ 全国美術館会議　〒110-0007　東京都台東区上野公園7-7　国立西洋美術館内　TEL 03-3828-0290

［デザイン］ 宮谷一款（株式会社エヌ・シー・ピー）［印刷］ 日本写真印刷株式会社　〒604-8551　京都市中京区壬生花井町3

# 冬ニモ負ケズ―学芸員のネットワーク

地家光二（ちけ こうじ・北海道立三岸好太郎美術館）

近況、とはいっても本稿執筆時（4月）から振り返る半年間は、北海道では毎年のことながら、ほぼ雪景色であった。地球温暖化の傾向とはいえ、まだまだ寒冷の地である北海道の冬。各地で「雪まつり」や「氷まつり」といった観光イベントはにぎわうものの、概して、冬季の美術館の来館者は、人数的には伸び悩む。観覧者をより多く見込みたい大型企画展などの開催も、春（地方によっては5月）から夏、そして秋まで（10月あるいは11月初旬）の期間に設定することが多い。その結果（かどうか）、冬の企画は分が悪い。悪循環にもなりがちである。ならば真冬に大規模企画で寒さ解消！、というのも特別な場合を除いてそうそうは難しい。季節要因の懸念を払拭しきれないのである。往々にして、複数企画を予定する美術館の年間計画の中では、地域の美術家や活動に眼を向けた自主企画展は、内容は積極的ながらも、会期は晩秋から冬におさまってしまうこともままある。

そうした冬の時期だが、「水」をめぐる表現に着目して14作家をとりあげた「札幌美術展　アクアライン」（札幌芸術の森美術館、2013年11月30日〜2014年2月16日）や、道東ゆかりの精鋭7作家による「道東アートファイル2013　in the LIGHT / in the SHADOW」（北海道立帯広美術館、2013年11月22日〜2014年2月2日）も、地域の美術家の仕事を丹念に見ての好企画であった。開催時期を云々するのは取り消すことにする。

そして、この冬、あえてこの季節だからこその開催を選んだ企画があった。美術館による企画ではない。北海道東部の十勝地方（最低気温はマイナス20度を下回ることもしばしば）で開催された「防風林アート野外展示」（2014年2月1日〜16日）である。帯広市郊外の防風林と周辺の広大な雪原（夏には耕作地となる）を舞台とした野外展で、北海道内の作家たちを中心とした40名以上が参加した。近年、北海道各地で増えてきている作家有志による野外展のひとつでもある。「もっともしばれる季節は、もっとも美しさを秘めた季節でもあります」と、主催者（帯広コンテンポラリーアート2013実行委員会）は述べている。環境や交通、気候など、観覧はある意味難儀な面もあっただろう。だが、まさにこの風土、この季節、この場所こそが必要だった企画の試みとして、まずはその意気込みを買いたい。

さて、北海道には、全国美術館会議の会員館としては13館だが、その他の公立館、私立館を含めて、60館以上の美術館（厳密には定義してないが）を数えることができる。規模も形態もさまざまであり、広い北海道内の各地にあって、それぞれに特色を示して美術品を公開し、守り伝えている。そうした道内の美術館を網羅するような組織は、いまのところないけれども、そのうちの多くの館に所属する学芸員等により構成される団体がある。以前にこの欄でも少し触れられているが、名称を「北海道美術館学芸員研究協議会」という。学芸員を中心に大学教員、個人会員なども含め、2014年3月現在の会員は計79名（所属組織は39機関。うち美術館等31館）。毎年開かれる総会・研究協議会が、会員相互の交流と研修の場となっており、去る3月6日･7日には、第22回の総会・研究協議会が開催された（北海道立近代美術館、札幌）。

同会での研修内容は外部講師の講演や、会員の研究発表・事例報告、日頃の問題点に関する研究討議など多岐にわたり、それらの概要を、会報『NORTHERN OWLS』にまとめている。講演では、修復家、表具師、新聞社美術記者、広報プロデューサー、医学博士ほか多彩な講師を迎え、会員の発表や報告も、企画展関連のものから美術館学や美術館教育、北海道美術史関連の作家や作品、各美術館での地域事情に応じた様々な活動の取り組みについてなど多様である。近年の会報には「紀要編」として頁を設け、会員からの論文を掲載している。また、北海道の美術館学芸員にとって共通（必修）科目ともいえる〈北海道美術史〉について、各会員館での調査の蓄積をもとに共同研究企画なども構想されたりする。こうした研修や研究の充実が、会員の資質の向上につながり、それぞれの館の活動の充実につながっていくものと思う。それとともにまた重要なのは、道内各地の会員たちが顔をあわせて意見を交わせることである。北海道の広域性から、離れた地域の館とは直接の用務がないと、互いに訪問したりする機会のないこともある。そうしたなかで、年に一度とはいっても同じ場で会えることは、学芸員同士の結びつき、ネットワークをより強めていくものになるだろう。総会は毎年3月（北海道はまだ冬）だが、冬に負けない、冬ならではの着想も語り合っていきたいと思う。

防風林アートプロジェクト野外展示

# 震災から3年

佐藤秀彦（さとう ひでひこ・郡山市立美術館）

今年の3月で東日本大震災から3年が経過した。短いようで長いこの3年だった。東北ブロックの博物館活動は、どの館もおおむね震災以前の活動を取り戻したかに見える。しかしその中で、福島県の双葉町、大熊町、富岡町などの帰還困難区域（旧警戒区域）内にある資料館等の活動は、いまだ休止したままである。

福島県内の立ち入りが制限されていた、いわゆる「警戒区域」からの文化財レスキューは、他の地域からは少し遅れて2013年から始まり、なお継続中である。白河市の福島県文化財センター白河館「まほろん」では、2013年に仮設の収蔵庫2棟が完成し、文化財レスキューによって救出された文化財が収められた。資料の内容は、土器や石器等の考古資料、歴史文書、生活用具、農具等の民俗資料が多い。また2013年に、「文化財復興展　救出された双葉郡の文化財I」（2013年3月7日～6月9日）を開催して、救出された文化財を展示公開している。

先日、「まほろん」で開催されていた続編ともいえる展覧会「文化財復興展　救出された双葉郡の文化財II」（2014年1月18日～3月23日）を訪ねた。この企画展の展示品は、おもに民俗資料に相当するもので、こけし、仏像、甲冑、鞍、和鏡、かんざし、カメラ、そして縄文土器などである。所有者は、双葉町歴史民俗資料館、大熊町民俗伝承館、富岡町歴史民俗資料館の3館であった。中には大熊町の諏訪神社で、震災前まで使われていた獅子頭（ししがしら）など、町民生活に根ざした品も展示されていた。震災による住民の避難が今も続くなか、これらの文化財が一日でも早く所蔵館のもとへ戻り、その地域の歴史の拠り所となって、地域の人びとをまた結びつける力となること願ってやまない。

また、震災以降、海外からの震災復興支援の展覧会が開催されているが、2013年度には、「若冲が来てくれました―プライスコレクション　江戸絵画の美と生命―」が、岩手県、宮城県、福島県の3県で開かれたことは記憶に新しい。伊藤若冲の作品をはじめとする有数の江戸絵画のコレクターとして世界的に知られている、ジョー・プライス氏とエツコ夫人のコレクションを紹介するものだ。

昨年、郡山でプライス氏とエツコさんにお会いする機会があった。お二人は、東日本大震災のニュース映像で津波が押し寄せるのを見て、放心状態になったという。その後2012年5月に来日し、陸前高田市などの被災地をご自分たちの足で訪ねている。一面灰色の瓦礫が積み重なる様子を見て、「どこを見ても、まったく色がないのよ！本当に悲しかった！」「避難所で配られたおにぎり1個に「ありがとうございます」と頭を下げられておられた東北の人々に、せめて私たちが持っている美しいものをお見せしたいという思いに駆られた」と当時の心境を語っておられた。その熱い思いが、この3県3会場を巡回する展覧会となって実現したのである。

なお、会場となった岩手県立美術館（約70,300人）、仙台市博物館（約104,200人）、福島県立美術館（約155,600人）では、記録的な入場者数を集め、今後その記録を抜くことは非常にむずかしいのではないだろうか。各会場とも、高校生以下を無料とし、子供にも理解しやすい解説をつけるなど工夫を凝らしており、図録の売り上げの一部も被災地への寄付にあてられたと聞く。そして何よりこの展覧会の大きな原動力となったのは、毎週のように会場に足を運んでサイン会を開き、来館者と握手をするプライスご夫妻の献身的な姿があったからこそであろう。

震災関連の展覧会のほかにも、「ジパング展　沸騰する日本の現代アート」は、秋田県立近代美術館（2013年9月14日～11月10日）、青森の八戸市美術館（2013年7月13日～8月25日）と東北では2会場を巡回した。日本の伝統芸術のDNAを受け継ぎながら、従来の表現の枠に留まらず、自由闊達な表現を模索する新進気鋭の作家たちを紹介した意欲的な展覧会であった。

福島県内では、いわき市立美術館が空調設備の改修工事を行っているため、臨時休館中である（2013年9月17日～2014年11月14日）。休館中は、「みんなで元気になるアート・キャラバン3　（4月～11月上旬）」など、おもに館外活動を精力的におこなっている。また福島県立美術館でも空調機の入替え工事のため、2015年度に約1年間休館する予定である。

また、今年度の巡回展として、岩手県立美術館の所蔵する舟越保武の彫刻作品を核とした回顧展「舟越保武彫刻展」が、岩手県立美術館（2014年10月25日～12月7日）をスタートし、郡山市立美術館（2015年1月24日～3月22日）、そして次年度、練馬区立美術館へと巡回する。この展覧会には、《原の城》や《ダミアン神父》などの代表作をはじめ、これまで未発表であった《長崎二十六聖人殉教者記念碑》のためのドローイングなどが出品される予定であり、充実した展示となることだろう。

福島県文化財センター白河館「まほろん」、仮設の収蔵庫2棟

収蔵庫内部に収められた被災地の文化財

# 足元を見つめて

染谷 滋（そめや しげる・富岡市立美術博物館 福沢一郎記念美術館）

昨年 10 月から今年の春までの関東ブロックの展覧会で、記憶に残るものを報告したい。

まずは、私の前任地である群馬県立館林美術館での「山口晃展」（2013 年 10 月 12 日〜 2014 年 1 月 13 日）を挙げねばならないのだが、私自身が在職中に GO サインを出していた展覧会である上に、喜怒哀楽の感情が交叉した出来事が続き冷静には語れない立場にある。館林に近い桐生市出身の人気作家山口晃の「画業ほぼ総覧」展で、地元の利を生かし、桐生市での盛り上がりも含め、展覧会そのものは大成功であったことだけを報告しておきたい。

次いで、私の住む地元前橋市にやっとオープンしたアーツ前橋である。既に 2 年前の本誌 vol.2 で前山裕司が報告した通り、市長の交代で白紙になりかけていた前橋市立美術館ではあったが、昨年 10 月 26 日無事グランドオープンした。市長交代の時点では、工事の進行を止めるには遅すぎた事が幸いしたわけだが、半年間余りの一般市民を巻き込んだ再検討の議論は、美術館の市民への浸透を助けた点ではプラスであった。前市長の元で進んでいた開館へのプロセスは、教科書的に手順を踏んで、傍目には十分と見えていたのだが、どこか行政の筋書き通りの意見交換会に終始していたようで、市民の側の真剣味に欠けたところがあったからだ。「アーツ」という名称は、「アート」を複数形にすることで従来の美術館のイメージから抜け出そうとするものだが、地元作家を十分に活用したオープン展「カゼイロノハナ」（2013 年 10 月 26 日〜 2014 年 1 月 26 日）は、名品や著名作家に頼らずに質の高さを維持して、十分に及第点が付けられた。もっとも、アーツ前橋で最大に評価すべき点は、1971 年生まれの若い住友文彦を館長に据えた事だろう。年功序列の日本社会に、新しい風を吹き込んでほしいものだ。

アーツ前橋は昨年開館を待たずに全国美術館会議に加盟した。当館なぞは 20 年近く経って今年漸く加盟したのだから何をか言わん。当館ほどではないが、同じように歴史のある小杉放菴記念日光美術館も昨年仲間入りしている。新年早々日光まで車を走らせ、「山崎省三・村山槐多とその時代」展（2014 年 1 月 1 日〜 2 月 16 日）を見た。同じ関東ブロックの横須賀美術館との共同巡回展で、大正期の日本美術院研究所で「美術院の若き三銃士」と称えられた村山槐多・山崎省三・今関啓司の周辺を探る展覧会だ。丹念に調べられ、解説も行き届いて愛情がこもり、カタログも充実している。小杉放菴記念日光美術館は、観光地に作られながらもしっかりと足元を固める学芸活動をしていて、以前から好感が持てた館だ。

この展覧会では、山崎省三の出身地である横須賀美術館の日頃の蓄積が大きかったようだが、その横須賀美術館には 2 月末に寄った。「海辺のミュージアムでみる日本画展」（2014 年 2 月 8 日〜 4 月 13 日）を開催中で、収蔵品による展覧会だったが、近代洋画の充実度が印象にある館で、これほど日本画があったのかと驚いた。30 人の画家で約 90 点だそうだが、洋画家の水墨作品を加えると 170 点以上になるという。こういう所蔵品展は掘り出し物に出くわす面白さがあって楽しい。学芸員のあの手この手の工夫も、自ら楽しんでいる風で良かった。

日光に向かった日は、栃木県立博物館にも立ち寄った。美術部門があるとはいえ、県立博物館で全国美術館会議に加盟している館は珍しい。当館にも歴史民俗部門があって美術博物館と称しているが、美術館機能が大半なので全国美術館会議加盟は当然なのだが、どこぞの県立美術館でさえ脱退するご時世に立派な心構えだ。この日は人文系テーマ展として、「小泉斐とその周辺」（2014 年 1 月 11 日〜 2 月 16 日）の初日だった。江戸時代後期の下野を代表する画人の展示で、斐（あやる）の作品は館蔵品中心の 12 点ではあったが、没後 160 年を記念しての特集展示で、滅多に見ることができない作家だけに興味深かった。館の役割を十分に果たしていてミュージアムの手本だと感じた。

日本近代美術を専門とする私にとっては、この時期の関東ブロックの大型展で、横浜美術館の「横山大観展」（2013 年 10 月 5 日〜 11 月 24 日）と「下村観山展」（2013 年 12 月 7 日〜 2014 年 2 月 11 日）を挙げないわけにはいかない。どちらも見応えたっぷりで、さすがは横浜美術館と感心したが、これだけ大物の日本画家を続けて開催できる学芸の層の厚さにも驚いた。

驚いたと言えば、神奈川県立近代美術館 葉山の「柳瀬正夢展」（2014 年 2 月 11 日〜 3 月 23 日）は圧巻だった。北九州市立美術館で立ち上がり愛媛県美術館へと巡回するが、一人の作家が時代を体現する見事な例と言えるだろう。450 頁ものカタログも圧巻で、展示点数の多さも含め、担当者のご苦労をねぎらい、その健康を祈るばかりだ。

北九州市の名が出たところで、最後にもう一度前橋に戻って終わりにしたい。アーツ前橋の開館企画第 2 弾は、北九州市出身の白川昌生を紹介する「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ」（2014 年 3 月 15 日〜 6 月 15 日）だ。22 歳で渡欧、35 歳で帰国して群馬に移住した白川は、「場所・群馬」を提唱して中央集権的な既存の芸術活動を批判する。現在 65 歳。その刺激的な展覧会と白川の活動の全貌は、足元を見つめるアーツ前橋の活動と併せて注目が集まる。

足元を見つめることは、年輪を重ねてきた全国の美術館にとっても、還暦を過ぎた私のような者にも、転ばないために必要なことだろうし、若い美術館には飛躍のための土台固めとなるに違いない。

アーツ前橋「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ」展示風景

# 「レガシー」を見据えて
## —2020 東京オリンピック文化プログラム—

岡部友子（おかべ ともこ・東京都庭園美術館）

2013 年度後半の美術や美術館に関わる話題でインパクトが強かったのは、9 月に 2020 年オリンピック東京招致が決まったことだ。美術とスポーツの祭典オリンピックは一見結びつかないかもしれないが、世界中から人々が集まるこの機会に、東京をどのような「おもてなし」都市に見せていくのか、文化プログラムに対する期待は大きく、今後、美術館・博物館などを含む文化施設には避けて通れない課題となるだろう。

その中でロンドンオリンピックを参考にしようと「オリンピック・パラリンピックと文化プログラムーロンドン 2012 から東京 2020 へ—」と題したオープンフォーラムが 2014 年 2 月 15 日東京国際フォーラムで開かれ聴講した。（主催：アーツカウンシル東京、ブリティッシュ・カウンシル） 英国ではオリンピック開催の 4 年前（北京オリンピック終了時）から「カルチュラル・オリンピアード」と題した大規模な文化プログラムが英国全土で展開された。また、「カルチュラル・オリンピアード」の集大成として、オリンピック開催時期にロンドンを舞台に 3 か月間に渡り「ロンドン 2012 フェスティバル」が開催された。この文化フェスティバルでは約 34,000 の文化イベントが開催され、2000 万人の人が参加したと、その実績が資料に記されている。

このフォーラムに登壇したのは、壮大な文化プログラムのディレクターでありキュレーターのルース・マッケンジー氏、ロンドン市文化部長ジャスティーン・サイモンズ氏、アーツカウンシル・イングランド　エグゼクティブ・ディレクター　モイラ・シンクレア氏、3 名の女性だ。モデレーターはニッセイ基礎研究所　主席研究員吉本光宏氏が務めた。2 時間にわたる講演の中では、アーティスト、文化施設、行政、企業、地域をまとめあげ、成功に導くまでの苦難続きの経過や、その成果、レガシーが語られた。その中で特に「レガシー」という言葉が心に残った。参加者やイベントの数だけでなく、祭典の後に何が残せたかが重要なのだという。

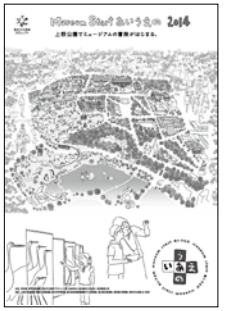
前回 1964 年の東京オリンピックのレガシーが高度経済成長であるなら、今回のオリンピックのレガシーは文化の成熟した、安心で安全な日本を真の意味で定着させることではないかと、オリンピック招致の際に出されたメッセージから想像できるだろう。このことは将来の美術館運営にも深くかかわることだ。オリンピック文化プログラムを単に盛り上げのためのお囃子で終わらせるのではなく、将来の美術館運営に果実を残すことを見据えたプログラムを考えていく必要があるだろう。東京の文化行政もロンドンの例を参考に文化の成熟した都市東京をいかにアピールするか、本腰を入れて検討を始めている。

私の所属している東京都庭園美術館は、本館、新館、庭園の大規模改修で 3 年に渡り休館し、この秋リニューアルオープンする。この機会に、オリンピックに向けて、まず外国語対応に取り組むこととし、施設案内やウェブサイト、音声ガイドなどの多言語化を計画している。また、オリンピック歓迎気運を盛り上げる地域の拠点となるよう、地域連携などにも取り組み、地域に支えられ安定した美術館運営につなげたいと考えている。その手法として第一に挙げられるのが教育普及事業だ。

ロンドン 2012 フェスティバルでも、街中で市民参加型の様々なワークショップが繰り広げられた。東京都庭園美術館では休館中も美術館活動として教育普及事業は続けていた。建物が使えないため、アウトリーチの活動となったが、美術館の箱の中から外へ出ることを余儀なくされたことはかえって、地域連携や教育普及事業のフィールドを広げる良い機会になったと考えている。そのような観点から東京ブロックの活動を見渡した時、意欲的な取り組みが目立ってみえたのが東京都美術館のアート・コミュニケーション事業だった。東京藝術大学と共同で取り組んでいる「とびらプロジェクト」、上野公園内の 9 つの文化施設を舞台にした「Museum Start あいうえの」など、周辺施設と連携しながらプロジェクトを実施し、予想を大きく上回る参加者を数えた。

このように既に東京では、オリンピック文化プログラムに取り組む以前から、美術館、行政、企業等による文化プログラムが各地域で無数に行われている。一つ一つの事業はその性格上小規模となるが、俯瞰的視点でみると近年の大きなムーブメントと捉えることができる。2020 年は先のようでいて、事業を計画するには実はそれほど時間はない。すでに様々なプランを考え始めている施設もあるだろう。これらをまとめ上げ、文化の成熟した都市東京のブランディングを誰がどう行うのかが今後注目されるところだ。いずれにしても、オリンピック開催は美術館にとって好機であると言えよう。そのレガシーを見据えて、より社会に定着した美術館になるために何を企画すべきか知恵の出しどころではないだろうか。

東京都庭園美術館ワークショップ　左官入門
会場：芝の家（港区）




東京都、東京都美術館・東京文化発信プロジェクト室、東京藝術大学主催「Museum Start あいうえの」パンフレット 2014 年版

# 30年後の第二次美術館建設ラッシュ

橋本文良（はしもと ふみよし・高岡市美術館）

第二次美術館建設ブーム？国家規模では中国からアジア、中東へシフトしているこの時代、地方レベルの富山では、1981年の富山県立近代美術館から始まり90年代になると自治体の美術館建設に沸いた。94年高岡市、97年砺波市、99年富山県水墨美術館と公立10館余りが開館。その後、財政難、運営予算削減のなか、ここにきて相次いで建設計画が公表されている。

主な要因としては、北陸新幹線開通を控えてのもの、長年の準備期間があったもの、市民の寄付金によるものなどがある。

2010年以降の流れを見ると、樂翠亭美術館（民間の運営、2010年開館、富山市内の和風邸宅をリニューアル）。ギャルリ・ミレー（2012年9月開館、富山市中心市街地にバルビゾン派のコレクション展示。提供した銀行と行政も関わる任意団体の運営）。ガラス美術館(仮称､2015年8月開館予定、ガラスをテーマとした街づくりへ向けて市中心部再開発ビルに富山市が建設を着手)。森記念秋水美術館（民間の運営。2016年5月開館予定、国内有数の美術刀剣コレクターが街の賑わい向上に貢献しようと中心市街地に建設を決めた）。他に県内では、小矢部市が2015年に新しい美術館の開館を予定、建設費や運営管理費が低廉で、展示と創作ができる施設となる。

注目の富山県立近代美術館については、新富山県立近代美術館（仮称）は2014年着工、16年秋に新築開館になるようだ。公表された移転の主因は、1）開館から30年を経過、施設の老朽化、耐震性が不足していることから「美術品補償制度」対象館とならず、美術品を借りることができない、国内外の美術館の連携から孤立してしまう。2）新美術館は現在地より利便性の高い地に移転。美術を楽しみ、学び、親しむ体験の場として、アトリエやギャラリーなどの新機能を追加、創作・発表・鑑賞を一体に、美術の体験や県内作家等の発表にワークショップ専門講座などを開催する。3）建設財源について、国の大型補正予算「地域の元気臨時交付金」制度の交付金を活用する。4）多様なメディア活用に取組み、これまでとりあげていないCGやアニメ、メディアアートにも視野をひろげるとある。四半世紀にわたる美術館活動の新たな転換になる。

その富山県立近代美術館のポスターを、開館以来一貫して制作してきた永井一正の代表作を集めた「永井一正　ポスター・ライフ 1957-2014」展（2014年4月19日～6月1日）では、全企画展のポスターとA4サイズのチラシの一群に感服。エッチングの原画から拡大したシルクスクリーンは、網膜ディスプレイでは得られない視覚体験であった。筆者は開館直後の「'81富山の美術」に出品し、その後も続く同展に何度か出品し、制作活動を続けてきた。いまや美術館人の範疇に入っているが、創作と展示の両面に携わることができ、お世話になったこの30年に感謝する次第である。

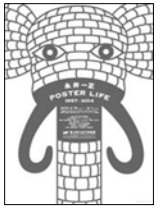
さて、基本でありながら切り口に苦慮するコレクション展、館所蔵に加えコレクター所蔵品や美術ファンの人気によるものがあった。「お宝拝見わが社の逸品」展（富山県水墨美術館、2013年10月11日～11月24日）は県内企業に加え個人が所蔵する美術作品を集めたもの。「あなたが選ぶベスト・コレクション展（高岡市美術館、2013年11月10日～2014年3月9日）では所蔵品目録更新に伴い、作品の総選挙を行い、上位得票を展示した。同様の企画として「あなたが選んだ 石川県立美術館名作の森」（2013年12月21日～2014年2月11日）では開館30周年記念に、所蔵品を人気投票によって選び出し全展示室にて展示し、「市民のコレクション展」（砺波市美術館、2014年1月11日～2月2日）は、美術館であなたのコレクションを展示してみませんかと呼びかけたもの。市民の所蔵品を鑑賞できる機会となる地域の規模に応じた企画であった。美術館をささえる市民の参加意識を高めるアイデアはまだ出せそうである。

当館のような中規模館では、県内や近県の集客を見込むメディアと組む実行委員会が成立するギリギリの人口規模である。そのなか、近年開催したまんがアニメ系はすべて好調で、「ドラえもんの科学みらい展」(2013年7月27日～9月8日)は、強力なPRにより歴代一位の入館者数となり、体験型のアミューズメント性に対し開催には異議があったが、藤子・Fさんの出身地として市民の賛同を得てのこと。追加の「藤子・F・不二雄ギャラリー」(2013年12月1日～2014年1月5日)では、高岡銅器製のドラえもんポストの展示と藤子作品の紹介、タイムレター（10年後に届く手紙）の受付で冬季の賑いとなったことを報告する。

自主企画のあり方を問われるなか、金属産業とゆかりの深い博物館・美術館と連携して共通点を探る「メタルズ！」(2014年6月28日～8月31日)の準備中である。美術館の戦略、創作、将来を担う子どもたちの未来へ、未知のアートの待望をキーに美術館活動の30年後を見据えたい。

高岡市美術館「藤子・F・不二雄ギャラリー」ドラえもんポスト

高岡市美術館「TAM総選挙」投票応募チラシ




富山県立近代美術館「永井一正　ポスター・ライフ 1957-2014」ポスター

# 作品の最適化をはかる

中村史子（なかむら ふみこ・愛知県美術館）

2013年度の下半期を振り返るうえで、最初に、国内最大級規模の国際美術展、「あいちトリエンナーレ2013」（愛知県美術館、名古屋市美術館ほか　8月10日〜10月27日）に触れないわけにはいかないだろう。あいちトリエンナーレ2013のテーマ「揺れる大地―われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」は震災や原発事故だけにとどまらず、私たちの拠って立つ基盤、アイデンティティーの揺らぎも示す。このテーマに即して出展作家、作品が選ばれたため、重く緊張感のある作品が多くなり、開催前には入場者の減少も心配されたが、結果的には前回を超える62万人の入場者となった。つまり、一見して美しいもの、分かりやすく楽しいものでなくても、真摯な表現であれば大勢の人に響くと言えよう。「考えさせる」作品が多かったトリエンナーレを通じて、このような確信を得ることができた。

また、トリエンナーレに呼応する形で、各地で力の入った現代美術展が行われた。とりわけトリエンナーレの会場ともなった岡崎市では、30代の作家が中心となった現代美術の展覧会「ユーモアと飛躍　そこにふれる」（岡崎市美術博物館、2013年8月17日〜10月20日）が開かれ、存在感を示した。世界の意味と「私」の関係性を言語によって解体/接ぎ木する小林耕平をはじめ、新しい知性の在り方を感じさせる展示内容だった。

以上、現代美術展について述べてきたわけであるが、その一方で、現代美術と美術館の相性という問題について、あらためて考える機会にも恵まれた。事実、美術館と現代美術はそれほど相性が良くない。美術館は作品を安定的に収蔵し管理するべく制度化された施設だが、現代美術作品には、美術館での展示や保管に適さない素材、技法が数多く含まれているのは周知の事実である。

その一例として、当館開催のコレクション企画「アイチのチカラ」展（2013年11月29日〜2014年2月2日）について述べたい。この企画は、愛知県の戦後美術史を美術大学の設立等のトピックを軸に紡ぐ内容だったが、戦後美術史全体の概観を期待した鑑賞者からは、ゼロ次元のパフォーマンス等、戦後の東海地域で興隆した反芸術運動の紹介がないのは何故か、というご意見をいただいた。実際のところ、これらパフォーマンスやハプニング等の活動を当館は所蔵していないので展示できなかったのであるが、こうした意見は、彼らの活動を作品として収蔵、展示する難しさをあらためて痛感させた。また仮に、これらの活動を記録した映像があったとしても、それを生き生きと展示室内で見せるには相当の努力を要しただろう。過去のパフォーマンス等を記録した写真や映像を、鑑賞者が記録ではなく表現として受け止めるのは容易ではない。

このような問題に対する一つの回答として、「ハイレッド・センター：直接行動の軌跡」（名古屋市美術館、2013年11月9日〜12月23日）をあげたい。ここでは、鑑賞者がHRCの目撃者となる、という設定で展示が構成されていた。そもそもHRCの行為は、それを目撃する第三者も含みこんで成立する芸術表現である。そのため、この展覧会で採られた目撃者として鑑賞者を巻き込む手法は、HRCの特徴と、「見るための場」である美術館の展示室を有機的に結びつけたものと言えよう。

第三に、コレクション自体を、特定の視点から編集し直し新たに見せる企画について述べたい。

「遠回りの旅」（名古屋市美術館、2014年2月15日〜3月30日）では、「旅＝人生」というテーマで名古屋市美術館の古今の作品が展示され、地元のアーティスト・ユニットD.Dが迷路等の仕掛けを館内に施した。フリーダ・カーロの次にゴードン・マッタ＝クラークが現れるなど予測不可能な構成で、一種の胎内めぐりのような空間が生み出されていた。

また「ア・ターブル！ごはんだよ！」（三重県立美術館、2014年3月1日〜5月6日）では、食をテーマに国内のコレクションから多様な作品が集められた。例えば、愛知県美術館の所蔵作品、中山巍《スープを飲む老人》（1927年）が、鳥取県立博物館の前田寛治《物を喰う男》（1924年）と一緒に、孤食として紹介されていた。食というテーマに基づき各館のコレクションを並べることで、思いもよらぬ組み合わせや鑑賞が可能となっている。

さらに、「反重力　浮遊｜時空旅行｜パラレル・ワールド」（豊田市美術館、2013年9月14日〜12月24日）に出展されていた松澤宥と毛利武士郎の作品を取り上げたい。方眼紙に言葉を書き連ねた松澤の作品と、毛利の金属塊。けっして派手とは言い難い内省的なこの2点が、華やかな体験型の作品が多い「反重力」展の最後を飾っており、これらが共に、豊田市美術館の所蔵であることに、私はささやかな驚きと感動を覚えた。

以前からあるコレクションを新しい視点で紹介する試みは、新規の作品を紹介するのと同様にスリリングでやりがいのある仕事だ。無論、コレクションをテーマ的に見せることを、一種のエゴととる見方もあるが、既に作られた文脈に縛られて作品を並べるだけでは、作品は生きたものにならない。何より美術館が作品を収蔵するのは、50年後、100年後に、制作当時や収蔵当時にはなかった価値や意味がそれら作品から見出されるかもしれないからだ。その時代、地域、美術館の問題意識に即し、コレクションを眺める視点そのものを更新し最適化を図ること。そのような意識を、色々な形で見出すことができた半年であった。

「ハイレッド・センター」展会場風景
名古屋市美術館

近畿ブロック

# 現代美術コレクションの保存／美術館の未来

牧口千夏（まきぐち ちなつ・京都国立近代美術館）

2013年冬から2014年春にかけて関西の美術館で開催された展覧会の動向を概観すると、ターナーやグルスキーなど巨匠作家の回顧展のほかに、まとまったコレクションをもとに構成された展覧会が目を引いた。例えば諸橋近代美術館コレクションを紹介した「幻想の画家ダリとフランス近代絵画の巨匠たち」展（滋賀県立近代美術館、2014年2月8日〜3月30日）、ブリティッシュ・カウンシルの英国現代美術コレクションからなる「プライベート・ユートピア」（伊丹市美術館、2014年4月12日〜5月25日）、そして兵庫県立美術館での「フルーツ・オブ・パッション」（2014年1月18日〜3月23日）など。特に開催が神戸のみの「フルーツ・オブ・パッション」展は、兵庫県立美術館とポンピドゥー・センターの共同主催で、パリ国立近代美術館が過去10年間に同館友の会の寄贈によって収蔵した現代美術コレクションを中心に紹介したものだ。入口ではダニエル・ビュレンのストライプ作品が出迎え、日本でも人気のあるエルネスト・ネト、アンリ・サラなど国際的に活躍する美術家たちの主要作品を鑑賞する機会に恵まれた。特に注目したいのは、輸送や展示作業における作品の取り扱いに手間や注意を要する、素材が多岐に富むインスタレーション作品や映像作品が比較的多く含まれていたことである。こうした新しい素材やメディア、技法を用いた作品の借用・展示に際しては所蔵館の助言や協力を仰ぐことが重要であり、受け入れ側の学芸員にとっても作品の取り扱いに関する知識を共有する貴重な機会となりうるだろう。

国立国際美術館では、現代美術作品の受入・展示・保存・修復をテーマに3月1日に「現代美術をコレクションするとは?」と題する国際シンポジウムが行なわれた。ロンドンのテート・保存部門から2名のキュレーターを迎え、日本国内の美術館学芸員も交えての事例報告と意見交換の場がもたれた。現代美術の場合、絵画や彫刻などの従来のジャンルとは異なり、使用素材の多様さから修復・保存の対応が一筋縄ではゆかないことも多い。また作家が存命の場合、作家の了承のもとで再制作・再構成が行われるケースもある。このほど大阪、東京、青森において回顧展が開催された工藤哲巳を例に挙げるなら、作品に多用される樹脂や人毛などの脆弱な素材、かつて「新しい」テクノロジーとして導入されたが現在では入手困難な映像機器など、展覧会を契機として保存に向けた対応や更新が行われるケースもある。だが、こうした物質的なケアに関する議論以上にテートのスタッフが強調していたことは、作品収蔵あるいは収蔵前の時点で、作家や関係者から聴き取り調査を行い、作品に関する情報を可能な限り豊富に集めておくことの重要性である。つまり作品の可変性を肯定的に受けとめた上で、時代にあわせた素材の交換や移行を限りなくスムーズに行うための根拠として、作品に関する作家自身の考えやコンセプトが必要不可欠ということだ。他にも、記録を残すことがいっさい認められていないティノ・セーガルのパフォーマンス作品の収蔵事例が話題に上ったが、日本の美術館はパフォーマンス作品の収蔵に対して今後どのように取り組んでゆくのか、作家と向き合い、作品や美術館をめぐる概念の再検討を重ねながら、さらなる議論が必要となる。コレクションとは、作品の終着地ではなく、常に更新され未来へと開かれた存在として再定義しうるものではないだろうか。

美術館の未来へと思いを巡らした機会として、京都国立近代美術館で4月4日に行われたテート・モダン館長クリス・デルコン氏による講演会を挙げておきたい。これは展覧会「FUTURE BEAUTY 日本ファッション：不連続の連続」の関連企画であると同時に、2015年春に京都で開催予定の「PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭2015」のオープン・リサーチ・プログラムの一環でもある。「美術館はGoogleに答えられない疑問に答える」といった分かりやすい言葉で語られる、デルコン氏の新しい美術館モデルについての提案に、1階ロビーに集まった約250人の来場者は大いに惹きつけられた。デルコン氏は、テートでのアンケート調査にもとづき「美術館を訪れる動機として、美術作品の鑑賞以上に社会的なコミュニケーションの場が求められている」と指摘する。イギリスと日本の文化的背景に違いはあるにせよ、これは美術館に対する従来のイメージをあざやかに覆すものだった。京都の新たなプラットフォームとして期待が寄せられているPARASOPHIAは、先述したオープン・リサーチ・プログラムのほか、プレイベントとして、京都市内の元・立誠小学校で、南アフリカ出身の美術家ウィリアム・ケントリッジの映像インスタレーション作品《時間の抵抗》を展示し、着々と幅広い関心を集めつつある（2014年2月8日〜3月16日）。

最後に、大阪・天王寺にお目見えした日本一の高層ビル「あべのハルカス」の16階に、あべのハルカス美術館がオープンした。同じく建設・開館が待たれる大阪市の新美術館は、東京オリンピックの2020年までに開館準備することが決定した。どちらも従来の美術館の基本的な姿勢と活動を尊重したうえで、観光資源として美術館が今後果たしうる役割に大きな期待が寄せられている。関西のアートシーンは未来に向けてこれからも開かれている、と信じたい。

テート・モダン館長クリス・デルコン氏による講演会（京都国立近代美術館）
写真：野々下緑斗　提供：京都国際現代芸術祭組織委員会（PARASOPHIA事務局）

中国ブロック

# 「美術」をほぐしていく美術

三浦 努（みうら つとむ・鳥取県立博物館）

山陰側と山陽側とで公共交通機関の整備レベル等も異なる中国5県の美術状況を、地域差なく均等に実見し、報告することは難しい。また、「見ておきたい、語りたい」と感じる展覧会も人によって異なるだろう。よって、以下、2013年11月1日から翌年4月30日までの間の5県分の平等な実見報告としては不十分なものとなることをご容赦願いたい。

まず山口県。山口情報芸術センターの「池田亮司 “supersymmetry”」（2014年4月2日～6月1日）を観た。巨大な音量と、圧倒的な眩惑性を放つ壮大なインスタレーションを前にしばし呆然とした。近年の池田の量子情報理論などへの傾倒が反映された大作は、小さなパチンコ玉の「揺らぎ」の観測から始まる。美術と物理学の溶融に立ち会うような経験だった。

島根県では、「日本伝統工芸展」（2013年12月11日～25日）と、「開館15周年記念　ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの神話世界」（2014年3月20日～6月16日）を観た。とくにシャヴァンヌは、同館が開館前から研究を重ねてきたフランスの画家で、収蔵品もあり、その集大成として行われた、力の入った展覧会だった。

広島県では、広島市現代美術館の「アトリエ・ワン　マイクロ・パブリック・スペース」（2014年2月15日～5月6日）を観た。建築、美術、屋台、農業といったものの境界を自由に横断するユニークなプロジェクトの数々が紹介されており、大変刺激を受けた。前年の「路上と観察をめぐる表現史」展に続く、野心的な企画であった。

岡山県では、奈義町現代美術館など3会場を巡回した「アートの今・岡山2013　身体の記憶」と、後で詳述する、岡山県立美術館の「中原浩大展　自己模倣」（2013年9月27日～11月4日）を観た。「アートの今」では、岡山の表現者層の厚みをあらためて実感させられた。

鳥取県では、米子市美術館のリニューアル記念展「サントリー美術館コレクション展」（2013年12月15日～2014年1月19日）などを観た。そして筆者が所属する鳥取県立博物館では、この半年間に4つの美術系企画展を開催した。なかでも、長年の調査・研究をもとに自主企画で開催した「シリーズ 鳥取の表現者 File.05 Variations －絵画の多様性－」（2014年1月11日～2月14日）と「没後50年　菅楯彦展」（2014年2月22日～4月6日）は、入館者数は振るわなかったとはいえ、充実した図録も刊行する、館の存在意義を示せた企画展だったと考える。

以上が、該当期間中に私が主に美術館等で実見した美術系の展覧会である。そのなかでも、不均等を恐れずあえて詳述しておきたいのは、メディアでの取り上げられ方などから見ても最も問題提起的な展覧会だったと言える「中原浩大展」についてである。

本展は、中原の全貌を提示しようとする、これまでにはなかった画期的な試みである。それがどのように問題提起的だったのか。館のステイトメントにもあるように、中原は「美術」という概念や、「彫刻」というメディアそのものを問い質してきた作家と言われる。そのような作家の仕事を扱うことは、そのまま「美術」とは何か、ひいては美術館とは何かをも問うことになるだろう。ステイトメントからは、館がそれを自覚的に行っていたことが伝わってくる。会場を訪れた者の実感だが、個々の展示作品にせよ、会場のあり様にせよ、その全てが美術（展）の常識を一度反故にするような佇まいを見せていた。本展は徹頭徹尾、問題提起的だったということになるのだろうか。

明るいホワイエと、地下の少し薄暗い展示室に140点あまりの作品が冷徹に並ぶ。作品は周到に配置されたのだと思うが、一見すると「放置」されているようにも感じられた。慎重に放置された、とでも言おうか。この感覚は、横に並んだ作品同士の関係や文脈を容易に想像できないこと、或いは、意識的に関係が断ち切られているように見えることから来るのかもしれない。だが、やはりそれは中原の作品が本来持っている「孤絶感」に由来するのではないかと思った。日常のありふれたものでしかない、たとえばスーパーマーケットでよく見かけるアイスクリームの入った冷蔵庫も、中原の手が加わることで美術からも日常からも等しく遠い世界の存在になってしまう。会場の入り口付近に「ドカッ」と展示された謎めいた作品《フリーザーの使用》である。変色したバナナや電気製品が一緒に冷凍されているこの作品が私には最も衝撃的だったが、このようなものをここに置いてしまう中原という作家の、美術と日常の双方を明るく打ち砕く天性の批評精神に恐れを感じた。暴力的とも言える距離感をたたえた作品に備わる批判力を十分に引き出す展示になっていたと思う。

本展について語られた言説に見られる「自作焼失という惨事からの回復」「失われた作品の再制作と新作との関係」「幼少期の体験と感覚への回帰」といったキーセンテンスは、展覧会を実見した経験を深めるのには役立つ。だが私は、「すべて自分が面白いと思っていること。共感、反発してもらいたい」（「山陽新聞」朝刊2013年11月3日）という作家の言葉を読んで、しっくりきたのだった。近年求められる「分かりやすさ」から切り離された世界。展示会場で感じていた不安と快感の理由はここにあったのだと思った。「開かれている」ことをよしとする展示とは異なる、徹底的に「閉じている」展示。ということは結局、中原の作品は依然として謎のままだ。だが作家は「すべて自分が面白いと思っていること」と言ってしまった。ならば、後は我々が考えるしかない。我々と、「美術」というシステムが問われていると思うのだ。

ブロック報告の理想としては、中国地区の美術活動の傾向が行間から伺えればいいのだろうが、それには至らなかった。しかし、なかでも池田亮司、アトリエ・ワン、中原浩大の展覧会は、既存の美術のあり方を強く揺さぶり、解きほぐす力を放つものであった。そのような美術が中国地方で提示された半年間だった、ということだろう。

「中原浩大展　自己模倣」会場に展示された《フリーザーの使用》（再制作、部分）
撮影：永禮 賢　提供：岡山県立美術館

# リエゾン（かけはし）としてのアート
## ―四国こどもとおとなの医療センターをたずねて

牧野裕二（まきの ゆうじ・高松市美術館）

近年、アートを媒介に地域の活性化や観光促進を試みる動きが各地で見られる。香川県におけるその代表例はいうまでもなく瀬戸内国際芸術祭、通称「瀬戸芸」である。2013年の開催では初回を超え107万人の来場者を数えた（実質は30万人程度であったとの実行委員会の発表も）。個人的には作品間の質のばらつきが気になるが、それでも、アート巡礼の道中で瀬戸内の魅力的な自然や風俗と出会えるというのは素敵なことだ。今年4月には、かつて男木島に住んでいた3家族が芸術祭を契機にUターン移住し、小・中学校が再開するという「成果」も現れた。これはアートが島への文字通りの「かけはし」として機能したことを表す象徴的な出来事といえる。

本稿では、「かけはし」としてのアート活動の中でも、筆者が最近とりわけ強く心惹かれたある病院の取り組みを紹介したい。香川県西部の善通寺市にある「四国こどもとおとなの医療センター」における「ホスピタルアート」について。

高松から車で約1時間、善通寺市内に入りしばらく進むと、ハートの実をたくさんつけたカラフルな樹の絵を壁全体にあしらった愛らしい建物が視界に入る。筆者が勤務先のボランティア研修旅行の随行としてこの病院を訪問したのは、2014年2月下旬、同病院において全ての機能の整備が完了し、グランドオープンを迎える前日のことであった。庭などの造成が急ピッチで進められる慌ただしい雰囲気のなか、玄関で私たちを出迎え、施設案内をしてくれたのは、旧香川小児病院におけるホスピタルアート導入時から同事業のコーディネートを一手に引き受けてきた森 合音（あいね）氏と、アートサイコセラピストとして同病院に勤務する美術家の森かおり氏。

病院に足を踏み入れると、エントランスや廊下のいたる所にドローイングやインスタレーションが設置されている。絵本を思わせるソフトなタッチで、風景、植物、動物などが描かれた作品が多く、全体として人々を包み込むような優しい雰囲気にあふれている。もっともこのように書くと、弛緩した生気に乏しい空間がイメージされるかもしれないが、実際にはその真逆で、個々の作品は自身の魅力をしっかりと主張し、それぞれが響きあって、生き生きとした心地よい空間が作り出されている。

森氏が同病院のホスピタルアートに関わるようになったきっかけは、2008年旧香川小児病院の思春期病棟の壁画制作をひょんなことから院長に依頼され取り組んだことであった。地元善通寺にある樹齢千年以上のクスノキの絵を画家と相談して考え、その原画を患者や職員ら多くの人々とパッチワークのように少しずつ描いていった。すると、子供たちが殴る蹴るして壁に穴をあける行為はぴたりと止んだという。以来、アートプロジェクトは他のエリアにも広がり、新病院においては設計段階からアートを取り入れた環境づくりが行われ、一層の充実ぶりを示しながら展開していった。

「ホスピタルアートは患者、医療者、アーティストといった人々がみんなで考え、話し合い、共に作り上げていくもの。私たちの仕事は病院に集うこれらの人々をつなぐこと」と森氏は語る。そこにいる人々の思いや願いが、コーディネーターの仲介を通して作品に反映される。だから、どのスペースに飾られている作品も取ってつけたような感じがせず、しかるべき場所で伸び伸びと呼吸をしているのである。

紙幅の都合により作品紹介は1点だけとしたい。各フロアの廊下などいたる所に点在する「ニッチ」と名付けられた作品。これは壁の窪みに作られた飾り棚に月替わりで季節に対応した小さな作品が飾られ、傍らにある小さな扉を開けると、中に豆本や折り紙などの贈り物が入っていて、誰でも受け取ることができる、というもの（花も週替わりで飾られている）。小さなスペースでありながら、病院で過ごす人、あるいはそこを訪れる人が作品や贈り物を通して心を通わせることができる、魅力的なスペースである。「患者、医療者、アーティストをつなぐ」ホスピタルアートそのものを象徴するプロジェクトであるといえよう。その他の作品は、現地もしくは病院ホームページでご確認いただきたい。

ホスピタルアートは多くの人が共に作り上げるものであるが、だからこそそれをコーディネートする人物の働きが重要になる。アーティストと人々をつなぐこと。そしてそれらの人々に思いをはせながら空間を作り上げていくこと。このようなキュレーションの基本事項を私は満足いくかたちで遂行できているだろうか？同病院における見事なキュレーションを目の当たりにし、キュレーションの原点について考え直したいと思った。

最後に四国内の美術の動向を手短に。愛媛県美術館では同郷の美術家、柳瀬正夢の回顧展を開催。（2014年4月5日～5月18日）同じ愛媛県松山市の道後温泉では旅館室内にてインスタレーションを展開する「道後オンセナート2014」が開かれている。（2014年4月10日～12月31日）愛媛県新居浜市では2015年度中に美術・演劇・音楽などの複合施設がオープンの予定。高知県立美術館は2013年度開館20周年を迎え、「草間彌生 永遠の永遠の永遠」（2013年11月2日～2014年1月13日）に約3万人、ミレー展（2014年2月2日～4月6日）は5万人を超える入場者数を記録。同館では2014年10月、同郷の写真家・石元泰博の常設展示コーナーがオープンの予定。高松市美術館は館長、宮島久雄氏の勇退に伴い、2014年4月より篠原資明氏がアート・ディレクターに就任。2015年1月から2016年3月の間改修工事に伴い休館し、その後リニューアルオープンの予定。

四国こどもとおとなの医療センター廊下にある「ニッチ」プロジェクト。

同病院の庭。手前はイケムラレイコによるブロンズの母子像。

# 変わらずに在るために変わってゆくこと、風を呼ぶこと

竹口浩司（たけぐちこうじ・福岡県立美術館）

この 8 月で福岡に来て丸 14 年になる。つまり福岡県立美術館の学芸員としてそれだけの月日を過ごしてきた訳だが、私自身は性格の鈍重さもあって最近になってようやく福岡という土地にも学芸員という仕事にもなじみつつあるように思える。じつにゆっくりとした歩みだが、そんな私だからこそ実感していることもある。近頃さまざまな美術館（および美術館を巡る状況）に新たな風が吹きつつあるようだ。

まずは自館の紹介から。福岡県立美術館では私自身が担当した展覧会「郷土の美術をみる・しる・まなぶ 特別編　江上茂雄　風ノ影、絵ノ奥ノ光」（2013 年 10 月 5 日〜 11 月 10 日）を開催した。江上茂雄さんは当時 101 歳、残念ながら今年 2 月に他界されてしまったが生涯かけて描き続けたクレパス・クレヨン画、水彩画、木版画、鉛筆画など約 2 万枚が遺されている（展覧会で展示できた作品は 200 点ほどだが、ほかにも作品ファイルを自由に見てもらったり、8,500 枚におよぶ水彩風景画の画像を 3 期に分けてスライドショウで流したりした）。生涯「アマチュア」であり続けた「凡庸な画家」の全貌がいまだつかみ切れないほどの厚みを持っているという事実は、人が生きて在ることの尊厳をじんわりと沁みだしてくるし、実は現在もゆっくりと作品調査を継続中である。

この展覧会について書き出すと熱がこもり、切りがないので、あとは前号で北九州市立美術館の那須学芸員がすでに紹介くださったレポートや、現在も細々と続けている特設ブログや Facebook などをご覧いただきたい。その際に少し注目してもらいたいのが、当館が「ハンズさん」と呼んでいる独自の看視スタッフの存在である。約 10 年前、とある展覧会をきっかけに生まれたこの「ハンズさん」とともに、福岡県立美術館は展覧会の可能性を広げ、と同時にミュージアムの淵源へと深く潜っていくためにたくさんのトライ & エラーを重ねてきた。その蓄積と新たなトライアル（とエラー?）が江上茂雄展をつくっていった。

美術館という場は小さなトライ & エラーの連なりを活かす包容力と胆力とを備えていてほしいと願っている。変わりゆく現実の中で変わらずに在るためにこそ、多くの美術館が「今」において大切なものを手さぐりしながら練り上げようとしている。福岡市美術館で開催された現代美術展「想像しなおし」（2014 年 1 月 5 日〜 2 月 23 日）は全国の美術ファンにとって魅力的な展覧会であったのみならず、福岡の（とくに若い）美術ファンにとっては驚きでもあった。「福岡市美術館でこんな現代美術の展示ははじめてだ」との声をよく耳にした。

もちろん福岡市美術館はこれまでも現代美術展を数々開催し、高く評価もされてきた。ではなにが「はじめて」だったのか。おそらく展覧会が若い世代の人たちの目に生き生きと映ったこと、自分たちの日常と地続きでありながら別の世界を見せてくれるその揺らぎと跳躍に多くの人がリアリティを感じたからではないだろうか。国内外で活躍する 30 代の作家 6 人の多彩でバランスの取れたセレクト、テッサ・モーリス＝スズキの著作からインスパイアされたという印象的で切実な展覧会タイトルをはじめ、美術館という制度を疑いながら駆使することで実現された大がかりなインスタレーション、美術史的な言説から解き放って各作家をライブに語り直し、見つめ直そうとした展覧会図録、展覧会の魅力を余すところなく伝えようとしたチラシやホームページ、Facebook などによる重層的な広報など、展覧会を届けるべき人すべてに届けようとする担当学芸員の熱にも出品作家を含めた多くの人たちが共感を寄せ、刺激を受けた。

久留米の石橋美術館で開催された「はじめての美術館」（2014 年 1 月 11 日〜 4 月 13 日）は、子どもたちの「マイ・ファースト・ミュージアム」体験となるように工夫された展覧会だった。企画としては今や珍しくもないが、その企画意図の徹底ぶりが清々しかった。会場には親子をやさしく誘うかわいらしいイラストと、作品解説などどこ吹く風といった趣の自由な「おしゃべり」パネルが作品を解きほぐし、何より普段はあまり表に出ないであろう泰西名画を模写した作品が堂々と展示されている。一級品のコレクションを有する美術館だからこその懐の深さに嘆息すると同時に、美術史的な価値観とは別の物語を生みだそうとしている担当学芸員の心意気に脱帽した。ベビーカーを押すお母さんたちの通路を確保するためにと、普段は閉じられたままの入口付近の壁が開放されていたが、通りがよくなるのは人の通りばかりではないはずだ。

北九州市立美術館で開催された「柳瀬正夢展」（2013 年 12 月 14 日〜 2014 年 2 月 2 日）は、地道で堅実な調査を根幹に置いたヴォリューム満点の展覧会ながら展示デザインにもこだわりと工夫が満載で、北九州市立美術館の「らしさ」と「これから」とが体現されていたように思う。沖縄県立博物館・美術館で開催していた「森山大道展」（2014 年 1 月 23 日〜 3 月 23 日）は、森山氏の膨大な仕事を「沖縄」という視点から編集し直した刺激的な展覧会だった。他にもアントニー・ゴームリーの作品の設置を巡って議論を呼んだ国東半島アートプロジェクトや、佐賀県内 4 つのミュージアムで同時展開された「チームラボと佐賀」（佐賀県立美術館、佐賀県立九州陶磁文化館、佐賀県立名護屋城博物館、佐賀県立宇宙科学館、2014 年 2 月 28 日〜 3 月 22 日）をはじめ色々あるが、紙面が尽きた。

最後に再び自館のことを。福岡県立美術館は耐震補強工事のために 8 月末まで休館している。前身にあたる福岡県文化会館が出来たのが 1964 年なので建物としては今年でなんと 50 歳。今年 10 月には文化会館建設 50 年記念として「とっとっと？　きおく × キロク＝　」という展覧会を担当する。風を呼ぶことはできるのか。

「想像しなおし」福岡市美術館
（狩野哲郎の作品／撮影：山中慎太郎）

仙台・街のちいさな福島美術館として

no.1

# 福島美術館

〒984-0065　宮城県仙台市若林区土樋 288-2

TEL：022-266-1535
FAX：022-266-1536
E-mail：HUKUBI@nifty.com

［開館時間］
午前 9 時から午後 4 時 30 分まで

［休館日］
月曜日（祝日・振替休日の場合は開館）、第 1 日曜日、祝日の翌日、お盆期間、年末年始（12 月 28 日～1 月 3 日）

［開館時期］
1980 年 6 月 1 日

仙台の市街中心地にほど近い場所に位置する福島美術館は 1980 年に開館した「街のちいさな美術館」である。東日本大震災により 1 年 9 ヶ月休館したが、全国の方のご支援と補助金により再開が果たせた。

運営母体は全国的にも非常に珍しい共生福祉会という社会福祉法人である。社会福祉法人が運営している訳は、設立者である福島禎蔵（1890-1979）には、先代・與惣五郎（1864-1938）・先々代・運蔵（1810-1886）の 3 代にかけて収集した愛蔵品を寄贈して、そこで障がい者をはじめ、一般の愛好者に公開したいという考えがあったためである。ライフセンターというカルチャーセンターの機能を持たせた 4 階建ての 2 階 3 階スペースを展示室としている。展示室は 3 部屋とこじんまりとして、文字通り「福島さんちの美術館」である。

仙台の素封家であった福島家が収集した美術品は近世から昭和戦前にかけての絵画・書・工芸品が約 3,000 点、そして江戸から昭和の図書が 1,500 点ほどである。その主な内容は仙台藩伊達家関連資料となるが、郷土の作家としては仙台四大画家といわれる菊田伊洲、東東洋、菅井梅関、小池曲江の作品が揃っている。近代では、郷土の作家である熊耳耕年、遠藤速雄など直接収められた作品群のほか、近藤浩一路、小杉放庵、高村光雲刻《如来座像》、中林梧竹《朱画達磨画賛》など、作品は多岐にわたる。

しかし、これら資料データは開館当初作成したもので完全とはいえず、早急に公開できるよう目録作成の準備を進めている。

展示は年 3 回（春・秋・正月）ほどテーマ企画展を開催している。常設展示「福島家の玉手箱」では、仙台藩伊達家の資料を展示するほか、江戸時代後期の和時計（二挺テンプ式櫓時計）、大理石洋時計（アンソニア製）、真空管ラジオ、さらに東日本大震災でも、神棚から落ちなかった高村光雲《聖観音立像》などバラエティに富んだモノたちをコンパクトにみることができる。恒例のイベントである「紋きり遊び」と「クリニカルアート（臨床美術）」は、気軽に美術に関心をもってもらうための企画として好評である。

福島美術館が目指すところは、「老若男女がほっとできる空間」である。利用者の声に耳を傾けながら、細々ではあるが、着実に進んでいきたい。

（尾暮まゆみ・おぐれ まゆみ）





愛知県陶磁資料館から愛知県陶磁美術館へ

no.2

# 愛知県陶磁美術館

〒489-0965　愛知県瀬戸市南山口町 234

TEL：0561-84-7474
FAX：0561-84-4932
E-mail：touji@pref.aichi.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時 30 分から午後 4 時 30 分まで（入館は午後 4 時まで）7 月 1 日から 9 月 30 日は、午前 9 時 30 分から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（ただし休日の場合は開館し、直後の平日は休館）、年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）

［開館時期］
1978 年 6 月 1 日

愛知県陶磁美術館は、日本陶磁史における愛知の位置にかんがみ、1978 年 6 月 1 日に県政 100 年記念事業として「愛知県陶磁資料館」の名称で開館した。2013 年には 35 周年を迎え、これを期に名称を変更し「愛知県陶磁美術館」として再出発を果たした。

日本最大級の窯業地である愛知県瀬戸市の緑豊かな丘陵地に立地する当館は、28ha の敷地と延床面積 20,968㎡の施設規模を有し、展示面積 5,185㎡という、国内屈指の陶磁専門美術館である。現在のコレクションは 3 点の重要文化財を含む 6,842 点（2014 年 3 月末）であり、日本やアジアを始めとする世界各地の様々なやきものの魅力を、展覧会や関連催事を通じて紹介している。

そもそも、「土」という自然素材を焼くことにより生み出されるやきものは、原始時代から現代まで、世界中の人々の生活に不可欠なものとして、暮らしと産業を支えてきた。また、その特徴である文様や造形、土や釉薬の輝きや色などは、我々の美的感性や創造性を刺激し、現在も多くの芸術作品が生み出されている。館の基本理念として掲げているのは、こうしたかけがえのない歴史的文化財や芸術作品など様々な魅力を湛えたやきものについて、より多くの人々に鑑賞、制作、学習等の機会を提供すること、さらには人々が知性と感性を高め、創造的で多様性のある心豊かな地域社会の実現を目指すことである。

展示活動においては、日本及び世界の主要な窯業地の美術的・歴史的に優れた陶磁作品・資料（コレクションを中心）を常設展で紹介している。さらに企画展では、陶磁を中心として工芸全般まで領域を広げ、地域、時代、作家、生活文化など、様々な視点からテーマを捉え、歴史的文化財としてのやきもの、芸術作品としてのやきもの、日常の生活とともにあるやきものなど、その多様な価値観と魅力について取り上げている。

また、教育普及や地域の文化創造の拠点としての活動にも力を入れている。作品鑑賞や陶磁文化への理解を深めるための講演や展示解説を行うとともに、初心者や愛好者など様々な利用者ニーズに対応した各種教育講座の開催、学校連携によるスクールプログラム等の充実強化などにより、やきものの歴史的文化財としての役割、芸術的魅力などを積極的に紹介している。

今後、陶磁文化の世界への発信の役割を担う館としての自負をもち、国内外での展覧会活動や国際交流展の開催、海外からの陶磁観光の誘致等を展開し、愛知が誇る日本の陶磁文化を世界に発信していきたい。

（佐久間真子・さくま まさこ）

人を育み、文化を育み、まちを育む

no.3

# 上田市立美術館

〒386-0025　長野県上田市天神 3-15-15

TEL：0268-27-2300
FAX：0268-27-2310
E-mail：santomyuze@city.ueda.nagano.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は 4 時 30 分まで）

［休苑・休館］
火曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始

［開館時期］
2014 年 10 月 2 日

上田市は、人口 16 万人。戦国武将の真田氏の城下町であり、菅平・美ヶ原に囲まれた高原都市でもある。上田市立美術館は、JR 長野新幹線上田駅から徒歩約 7 分、ホールやスタジオを有する交流文化芸術センターとともに 2014 年 10 月 2 日に開館する。施設全体の愛称は「サントミューゼ」。

施設の設計は、東京都現代美術館や新国立劇場などを手がけた柳澤孝彦によるもので、直径約 100m の円形芝生広場を囲むように美術館やホールが配される。コンクリートを基調に、外観は焼杉、内観はカラマツの縦ルーバーをアクセントとしたデザインとなっている。

活動の基本理念には、人を育み、文化を育み、まちを育む「育成」を掲げ、美術館、芸術センターが一体となって取り組む方針である。美術、音楽、演劇、舞踊、さらにはそれらのジャンルをも越境したアートの拠点を目指し、施設の外での活動も積極的に行っていく。

美術館には、国指定文化財公開承認施設グレードの企画展示室、収蔵庫のほか、常設展示室、市民アトリエ・ギャラリー、アトリエ、子どもアトリエ、ミュージアムショップ、アートライブラリーなどを設置し、作品の鑑賞だけでなく、市民の創作活動や展示発表の場、さらには交流や憩いの場としての機能も果たす。さらに当地上田は、洋画家にして創作版画の提唱者でもある山本鼎が活躍した地で、1962 年開館の「山本鼎記念館」がその顕彰に努めてきたが、このたび閉館し、新美術館が機能継承することとなった。

常設展示室では、山本鼎のほか長年上田市で彫塑指導をした石井鶴三、当市出身でアメリカで活躍した写真家、ハリー・K・シゲタ（重田欣治）を中心に展示し、中村直人、林倭衛、村山槐多などの収蔵作家作品も順次展示する。企画展示室では、開館記念「山本鼎のすべて」展を皮切りに、版画関連の企画展、若手現代作家の作品展などの開催を予定している。

また、山本鼎が当時の美術教育の主流であった臨画指導に疑問を呈し、1918 年に当地で児童自由画教育を提唱、全国へと広まったという歴史からも、「子どもアトリエ」を中心に、一人ひとりの感性を伸ばす育成型の活動に力を入れていく。展示室での作品鑑賞だけでなく、アトリエや広場といった、ワークショップや造形活動などがのびのびと行える環境を活かし、子どもたちが自分の体全体で直接感じ、考え、表現できる機会を数多く設けていきたいと考えている。

（瀬川智恵・せがわ ちえ）





地域に根ざした、かまぼこ屋根の美術館

no.4

# 富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館

〒370-2344　群馬県富岡市黒川 351-1

TEL：0274-62-6200
FAX：0274-62-6201
E-mail：bijyutu@city.tomioka.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで
（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始（12 月 27 日～1 月 4 日）、展示替え期間およびメンテナンス期間

［開館時期］
1995 年 8 月 8 日

富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館は、世界遺産登録で湧く富岡製糸場の北西 3㎞、もみじ平総合公園内に 1995 年開館した。丘陵地帯に広がるもみじ平総合公園には、県立自然史博物館、かぶら文化ホール、市民体育館、野球場や陸上競技場をはじめとした様々な文化スポーツ施設が揃い、県と市が一体となって開発した地域である。当館は、新国立劇場をはじめとして、郡山市立美術館や東京都現代美術館の設計で知られる柳澤孝彦と TAK 建築研究所が手掛けた。群馬の山並みからイメージしたというかまぼこ屋根が、リズミカルに連続した形状が美しく、1 階には市民ギャラリーや視聴覚室、創作室などの貸出しスペース、2 階には有料の展示室が中庭を囲んで配されている。当館は、美術館と博物館の両方の機能を備えるとともに、富岡市出身の洋画家・福沢一郎の画業を顕彰する役割を負っているが、展示室は郷土資料展示室、企画展示室、常設展示室、福沢展示室 1・2・3 の計 6 室からなっている。鉄筋コンクリート 2 階建て、延床面積は 4,125㎡で、コンパクトながら様々な施設が一通り揃った館である。

収蔵資料は美術作品と関連資料が約 980 点、歴史・民俗資料が約 9,200 点あり、美術部門では福沢一郎作品が、寄託を含めて 369 点の大部を占めている。福沢作品以外では、福沢に関連したシュルレアリスムや初期独立美術協会の作家たちをはじめとして、富岡市ゆかりの作家が大半である。主要な収蔵作品は、開館に向けて準備していた時代の購入・寄贈作品が大半で、開館後は作品購入費もストップし、寄贈と寄託で微増するだけの状況が続いている。それでも、看板作家の福沢一郎に関して言えば、後発館の宿命としてやや代表作に欠く点はあるものの、初期から晩年までの作品を網羅して、作家の画業紹介には十分な質と量を誇っている。

企画展示室での展示活動は、近年では年 4 回の展覧会が常態化しており、マンパワー不足から巡回展中心の構成を取らざるを得ないのだが、5 年連続した「郷土の作家たち」展は、地域に根差した館の性格をよく物語っている。昨年開催の「平町公のワンダートリップ」は、大画面に絵巻物的世界を展開する平町公の芸術を、公立美術館で初めて個展の形で紹介し、富岡製糸場を含む富岡にちなんだ新作の制作もあり、見上げるような空間を生かした展示が評判となった。

富岡製糸場の世界遺産登録による中心街への観光客の増大をどう当館へと呼び込むか、民俗・歴史の資料を収蔵する特徴をどう生かすか、年々過去の作家となる福沢一郎への関心と調査研究をどう継続させるか、当館の課題は多い。

（染谷 滋・そめや しげる）

日本の近世大名家コレクション

no.5

# 林原美術館

〒700-0823　岡山県岡山市北区丸の内 2-7-15

TEL：086-223-1733
FAX：086-226-3089
E-mail：bijutsukan@hayashibara-museumofart.jp

［開館時間］
午前 10 時から午後 5 時まで
（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
毎週月曜日（月曜祝日の場合は翌日）
展示替期間（不定期）

［開館時期］
1964 年 10 月 1 日

林原美術館は、岡山城西側にある内堀の傍らに所在する私立美術館である。岡山城二の丸の一角を占めるこの地は、江戸時代には対面所（迎賓館）が設けられ、明治時代になると旧岡山藩主池田家の岡山事務所として使用されていた由緒ある場所である。

当館は、1961 年に急逝した林原一郎氏（1908-1961）の東洋古美術コレクション及び岡山藩主池田家から移譲された資料を中心に、国宝 3 件、重要文化財 26 件を含む約 1 万件を収蔵している。1961 年 7 月に財団設立、1963 年 9 月に館舎竣工、そして 1964 年 10 月に岡山市内で最初の美術館として開館した。敷地面積は 6,382㎡、床面積 1,919㎡、展示室面積 450㎡であり、設計は前川國男建築設計事務所で、岡山城周辺の景観にマッチした近代建築である。財団設立当初は林原美術館と呼称していたが、開館時に岡山美術館と改め、1986 年にもとの林原美術館に復した。現在は開館 50 年目を迎え、収蔵品を展示する企画展を中心として年に 5 回程度の展覧会を開催し、広く一般に資料を公開・展示している。

林原一郎氏の個人コレクションは、刀剣や陶磁器、螺鈿、彫漆などに代表されるように、日本を含む東アジアの工芸品が大きな位置を占めている。江戸時代の佐賀藩で焼成された鍋島焼や、仙台伊達家に伝来した竹菱葵紋蒔絵婚礼調度などはその代表格である。また刀剣は、同氏が最も熱意をもって蒐集したもので、収蔵している国宝は全て刀剣であることからも、当館のコレクションの原点と言えよう。

一方の池田家旧蔵品は、近世・近代を通じて池田家が所蔵していた什器（調度品）を中心とした資料群を、1951 年に池田家から移譲されたものである。こちらも日本の近世大名家コレクションを代表する資料となっており、江戸時代初期の元和年間（1615-1623）ころの京都市中や郊外を描いた洛中洛外図屏風をはじめ、アジア航海図、綾杉地獅子牡丹蒔絵婚礼調度や桃山時代の能装束などが重要文化財の指定を受けている。また近世初期の名君と言われる池田光政（1609-1682）自筆の「池田光政日記」に代表されるように、歴代藩主自筆の書画類も多数収蔵している。

館内にはミュージアムグッズを扱うショップや喫茶コーナーを設け、車イス用のリフトも設置するなど利用者の方の便宜を図っている。また、美術館講座・美術館周遊の旅・ワークショップ・お茶会・ギャラリーコンサートなど各種のイベントを継続的に実施して好評を博している。展覧会会期中の毎週土曜日には学芸員によるギャラリートークを実施し、教育普及活動も精力的に行っている。

（浅利尚民・あさり なおたみ）





21 世紀の創発的な社会に貢献する

no.6

# CCGA現代グラフィックアートセンター

〒962-0711 福島県須賀川市塩田字宮田 1

TEL：0248-79-4811
FAX：0248-79-4816
E-mail：https://www.dnp.co.jp/CGI/gallery/inquire/inquire.cgi

［開館時間］
午前 10 時から午後 5 時まで
（入館は午後 4 時 45 分まで）

［休館日］
月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）
祝日の翌日（土日にあたる場合は開館）
展示替え期間中
冬期（12 月下旬～ 2 月末）

［開館時期］
1995 年 4 月 20 日

CCGA 現代グラフィックアートセンターは、「21 世紀の創発的な社会に貢献する」という経営理念と「本業に近いところで息長く」の方針のもと、グラフィックデザインとグラフィックアートの分野で長年企業メセナ活動を展開してきた DNP 大日本印刷がつくった企業美術館である。ギンザ・グラフィック・ギャラリー（東京）と ddd ギャラリー（大阪）につづく同社の 3 番目の拠点として 1995 年 4 月に福島県須賀川市に開館した。現在は同社が設立した DNP 文化振興財団によって運営されている。

当館の所蔵品の柱は、アメリカ現代版画の作品群「タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション」と、現代グラフィックデザインの秀作を一堂に集めた「DNP グラフィックデザイン・アーカイブ」の二つである。

タイラーグラフィックス・アーカイブコレクションは、20 世紀後半のアメリカ版画の隆盛を牽引した版画工房、タイラーグラフィックスが 1974 年から 2000 年までの活動期間に 40 名の作家たちとのコラボレーションで制作した約 1,000 点の版画作品とその関連資料で構成される。フランク・ステラ、ロイ・リキテンスタイン、ロバート・マザウェルなど、アメリカ現代美術の巨匠たちの作品が多数含まれ、現代美術史を概観する上でも貴重な資料といえる。

一方の DNP グラフィックデザイン・アーカイブは、現代のグラフィックデザインを文化遺産として次世代に継承するという趣旨に賛同した国内外のデザイナーたちから寄贈された作品群である。現時点でポスターを中心に約 200 名の作家による 15,000 点以上の作品を含み、今なお成長をつづけている。また 2008 年には、戦後のデザイン界を代表するデザイナー、田中一光（1930-2002）の作品、原画、蔵書、手稿、写真などの膨大な史料からなる「田中一光アーカイブ」を設立し、研究者に公開している。同アーカイブは現在も整理作業中だが、史料数は目録化が終わったものだけでも 45,000 点を数える。わが国ではまだ少ない本格的な個人作家アーカイブとして、デザイン史はもちろん、さまざまな分野の学術研究に寄与できるものと考えている。

奇しくも当館が立地する須賀川市は、江戸時代の銅版画家、亜欧堂田善（1748-1822）の出身地である。グラフィックアートに縁のあるこの地の特徴も生かして、当館ではこれまでも市民が利用できる版画工房を開設するなど、地域文化の振興に貢献してきた。全国美術館会議への加盟を機に、諸先輩方のご指導を仰ぎながら、グラフィックデザインとグラフィックアートを通して人々が多様な価値観に触れ、創造性を刺激しあう場を提供していきたい。

（木戸英行・きど ひでゆき）

古径芸術をより深く、より多角的に

no.7

# 小林古径記念美術館

〒943-0835　新潟県上越市本城町 7-7

TEL：025-523-8680
FAX：025-522-7205
E-mail：kokei@city.joetsu.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで

［休館日］
月曜日及び祝日の翌日（ただし、月曜日が祝日の場合はその翌日）、年末年始（12 月 29 日～ 1 月 3 日）、展示替え期間

［開館時期］
2005 年 4 月 1 日

小林古径記念美術館は上越市出身の日本画家である小林古径の芸術を後世に伝えるため、2002 年に仮オープンし、その後、東京都大田区南馬込から移築復原した小林古径邸を一体的に運営することとして 2005 年に正式に開館した。美術館は市民の憩いの場である緑豊かな上越市高田城跡公園内に所在し、上越市立総合博物館と施設を共有している。

小林古径記念美術館では、「古径芸術を伝える」「日本文化を伝える」「人々の豊かな心を育む」ことを目的として、作品収集、調査研究、展示、教育普及などの事業を実施している。当館の所蔵作品は小林古径の本画や初期の素描・模写などを含めて約 1300 点の作品と古径ゆかりの品々などの多様な収蔵品で構成されている。本画では古径が梶田半古に入門する以前に描いたとされる《少女》や古径の絶筆《牡丹》、関係資料では作品に捺された印章や古径の結婚祝いに岡倉天心から贈られた端渓硯など、古径に関する多くの資料を収蔵している。

展覧会は年 4 ～ 5 回開催している。近年は「原三溪と小林古径」「梶田半古と小林古径」「小林古径生誕 130 年記念　小林古径展」など、古径に関する展覧会を中心とするほか、上越市や新潟ゆかりの美術作品の展示も行い、特色のある展覧会の開催に努めている。また、教育普及事業では、「和ーくしょっぷ　遊んでアート！」と題した年 6 回のワークショップを実施している。このワークショップでは、古径の芸術性に因み、日本画や箏、能、聞香など日本の伝統文化を気軽に体験してもらうことを目的としている。また、古径が使用していた日本画材にならって集めた「日本画体験キット」を制作し、学校や公民館活動等で体験キットを活用して日本画を気軽に体験する「アート体験プログラム　遊んで☆日本画」を年数回実施するほか、小中学生を対象にした 4 回の日本画講座「古径の楽校」など、美術館に親しみ、古径の芸術性に対して理解を深められるようなさまざまな事業を展開している。

美術館に隣接する小林古径邸（本邸）は、1934 年に近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八が小林古径の意を汲んで設計し、宮大工である岡村仁三によって建てられたものである。その建築学的重要性が評価され、2005 年に国の登録有形文化財となった。

小林古径記念美術館は、古径芸術を伝える作品群と古径の人物像を伝える古径邸とをあわせて見ることができる。また、さまざまな企画展やワークショップ等をとおして古径芸術をより深く、より多角的に知ることができるよう特色ある美術館を目指して事業を展開している。　（笹川修一・ささがわ しゅういち）





Art×Human―あらゆるアートを、あらゆる人に

no.8

# あべのハルカス美術館

〒545-6016　大阪市阿倍野区阿倍野筋 1-1-43 あべのハルカス 16 階

TEL：06-6621-0331
（一般のお客様用電話番号は、06-4399-9050）
FAX：06-6622-8091
E-mail：aham@rw.kintetsu.co.jp

［開館時間］
火～金　午前 10 時～午後 8 時まで
土・日・祝　午前 10 時～午後 6 時まで
※入館は閉館 30 分前まで

［休館日］
月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始、展示替え期間

［開館時期］
2014 年 3 月 22 日

「あべのハルカス美術館」は、ターミナル駅やオフィス、百貨店、ホテル、展望台などを擁する、高さ日本一の超高層複合ビル「あべのハルカス」の建設に伴い、同ビルの「芸術・文化の発信拠点」として、2014 年 3 月 22 日に開館した新しい美術館である。

あべのハルカス美術館を直接経営する「近畿日本鉄道株式会社」（以下、近鉄）は、伊勢から飛鳥、奈良を経て京都、さらには大阪と、我が国の歴史の舞台ともいえる地を結ぶ鉄道路線を有しており、沿線には数多くの歴史・文化資産に恵まれ、これらを重要な経営資源としている。近鉄では、これら沿線の歴史文化や地域社会への貢献を経営の基本理念とし、沿線史蹟の顕彰や文化の振興に、創業以来特段の力を尽くしてきた。「あべのハルカス美術館」の開設も、こうした近鉄の文化振興事業の一環に位置付けられるものである。

あべのハルカス美術館は、大阪阿部野橋駅という近鉄の主要ターミナル駅の直上にあるという便利な立地を活かし、誰もが気軽に芸術・文化にふれあい楽しめる「都市型美術館」を目指している。また、親しみ易さの中にも高い水準の展示内容を実現するため、超高層ビル内にありながらも、国宝・重要文化財も展示可能な設備仕様を備えており、近鉄沿線の文化財をはじめ、日本美術、西洋美術、現代アートなどの多彩な展覧会を開催していく。

開館初年度には、まさに近鉄沿線の歴史文化資産の代表的な存在である東大寺の展覧会を皮切りに、イタリア・ミラノにある貴族のプライベート美術館、ポルディ・ペッツォーリ美術館の展覧会、フランス・パリを代表する近代画家デュフィの大回顧展、世界各地から集められたスーラやシニャック等の数々の優品によって構成される「新印象派」展、大仏師運慶の傑作《八大童子像》が出品される高野山金剛峯寺の開創 1200 年記念展と、以上 5 つの展覧会が開催される。このように当館では、国宝・重文の展示は勿論、海外美術館からの有名作品の誘致を含め、毎年、年間 5 ～ 6 本程の多彩なジャンルの展覧会を企画・開催していく。

また、近鉄が長年にわたり沿線地域文化の顕彰のため収集して来た、近畿東海地域の歴史、民俗、文化などに因む古文書や絵図、絵画等の諸資料を当館の研究対象としており、近鉄直営の美術館として、これら資料の研究・展示も併せて実施する。

あべのハルカス美術館のコンセプトのキャッチコピーは、“Art×Human―あらゆるアートを、あらゆる人に”。あらゆる人とあらゆるアートが集結し、交差し、そこから新たな美と創造力が起ちあがるミュージアムとして活動したいと考えている。

（高見陽仁・たかみ ようじ）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社
有限会社アート・フリース（大阪美術）
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ
株式会社アトリエリーブ
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク
イカリ消毒株式会社
イセ文化財団
株式会社印象社
株式会社 NHK エデュケーショナル
M & I アート株式会社
エルコラインティング株式会社
オリゾンシステムズ株式会社
影山幸一
カトーレック株式会社
公益財団法人かながわ国際交流財団
湘南国際村学術研究センター
関西ペイント株式会社
株式会社ギャルリーためなが
株式会社求龍堂
株式会社キュレイターズ
株式会社グッドフェローズ
株式会社クレヴィス
株式会社廣済堂
株式会社生活の友社
「美術の窓」「アートコレクターズ」
全国美術商連合会
大日本印刷株式会社
株式会社丹青研究所
株式会社 TT トレーディング
株式会社東京美術倶楽部
凸版印刷株式会社
有限会社トップアート鎌倉
日本写真印刷株式会社
日本通運株式会社
株式会社パークウェーブ
株式会社美術出版社
美術年鑑社　新美術新聞
弘中智子
株式会社伏見工芸
株式会社文化環境研究所
有限会社丸栄堂
ヤマトロジスティクス株式会社
読売新聞東京本社
早稲田システム開発株式会社

（五十音順）





# 平成 26 年度第 1 回理事会及び第 63 回総会について

水野元洋（みずの もとひろ・国立西洋美術館）

2014 年 5 月 22 日（木）・23 日（金）の両日、広島県広島市内において広島県立美術館を担当館として、公益財団法人ひろしま美術館、広島市現代美術館にも協力いただいて開催された平成 26 年度第 1 回理事会及び第 63 回総会についてご報告いたします。

22 日午前に開かれた理事会では、審議事項として、平成 25 年度事業及び収支決算、平成 26 年度事業計画案及び収支予算（案）が承認されました。続いて、新規入会館・賛助会員の審査及び退会館の報告が行われ、「CCGA 現代グラフィックアートセンター（福島県須賀川市）」、「小林古径記念美術館（新潟県上越市）」、「あべのハルカス美術館（大阪市）」の 3 館の新入会が承認され、平成 25 年度第 2 回理事会で入会が認められた福島美術館、愛知県陶磁美術館、上田市立美術館、富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館、一般財団法人林原美術館の 5 館と合わせ、計 8 館が加わりました。一方、退会館が 4 館あったため、5 月末現在の会員館数は 371 館となりました。次に、役員の退任に伴う後任役員候補者について審議され、昨年度退任された青柳正規前会長、島田紀夫理事の後任の理事として、水沢勉神奈川県立近代美術館長、浅野秀剛大和文華館長が選任されました。次に、東日本大震災復興対策事業の採択報告と新規 2 件についての採択が行われました。次に、機関誌『ZENBI』への広告の掲載と、国立西洋美術館と京都国立近代美術館のミュージアムショップにおける一般への販売が承認されました。次に、新たに「地域美術研究部会」を設置することが承認され、企画委員及び部会長に、鍵岡正謹岡山県立美術館長が指名されました。次に、賛助会員を増やす目的として、これまでの特典に加え、機関誌への社名掲載、広告掲載の優遇措置などを追加することが提案され承認されました。審議では、会員証提示による会員館の展覧会観覧料の減免や、個人会員枠に対する特典などの意見もだされました。

報告事項では、東日本大震災復興対策委員会の活動報告、第 64 回総会の開催地及び担当館について報告されました。最後に、現状の事務局の体制を改善す

るため、今後検討していくこととされました。

同日午後、リーガロイヤルホテル広島「ロイヤルホール」にて、湯崎英彦広島県知事の歓迎挨拶及び青柳正規文化庁長官の祝辞の後、会員館 167 館、261 名の出席により総会が開催されました。

議事に入り、審議事項として、午前中の理事会の審議を経た平成 25 年度事業報告及び収支決算、平成 26 年度事業計画案及び収支予算案、平成 25 年度第 2 回理事会での審議を含めた新規入会館及び退会館、理事の退任及び選任について承認されました。

報告事項では、企画委員会と各研究部会からの平成 25 年度の活動報告として、理事会で承認された「地域美術研究部会」設置の報告があり、続いて保存研究部会、教育普及研究部会、情報･資料研究部会、小規模館研究部会、ホームページ部会、機関誌部会、美術館運営制度研究部会から活動報告がなされました。次に、東日本大震災復興対策委員会の活動状況や採択事業、救援・支援活動募金の継続、救援・支援対策本部の活動、救援・支援対策本部「東日本大震災美術館・博物館総合調査分科会」の活動、救援・支援対策本部「東日本大震災文化財レスキュー事業記録集分科会」の活動、「福島県内被災文化財等救援事業」への参加協力の報告が行われました。その後、文化庁から「美術品補償制度」についての説明がなされ、ICOM 日本委員会からは、京都を「世界博物館大会（ICOM 大会）」の開催地として立候補することを決定したことの報告がありました。

総会後の特別セッション「美術館の地域連携－広島の事例－」では、担当館の 3 館が登壇し、各館の概要紹介や「アート・アーチ・ひろしま 2013」における、それぞれに分野の異なる三つの美術館の連携事例について発表がなされました。

総会 2 日目の 23 日は、担当館をお願いした 3 館の施設見学と展覧会鑑賞が行われました。総会の準備と実施にご尽力をいただきました広島県立美術館、ひろしま美術館及び広島市現代美術館の皆様に、誌面をお借りして、あらためて御礼申し上げます。

また、次回の第 64 回総会は、郡山市立美術館、福島県立美術館、いわき市立美術館、諸橋近代美術館の 4 館が共同でご担当いただくこととなり、2015 年 5 月 28 日（木）、29 日（金）に福島県郡山市で開催されます。年に一度の総会がより一層有意義なものになるよう、本年と同様に多くの会員館の皆様のご参加をお願いいたします。



# 編集後記

本号で『ZENBI』も 6 号を数えるに至った。本号の編集にあたって、ブロック報告等の執筆依頼に対しては直ちに快諾をいただき、原稿の入稿も順調であったことは次第にこの冊子が認知されてきたことを物語っているかもしれない。

「全美フォーラム」では引き続き、美術館の倫理規程に関する記事を掲載した。この問題に関しては、現在、美術館運営制度研究部会において引き続き議論されていると聞く。早い時期にこの問題に関わった関係者と現在この問題を協議している当事者、お二方の原稿から問題の奥行きを読み取っていただければ幸いである。ほかの原稿も震災後の美術館が直面する問題について様々の角度から光を当てているように感じられる。

なお、前号の 5 号より、国立西洋美術館、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館の各ミュージアムショップで販売を開始した。売価は 300 円である。機関誌という性格上、一般には入手しにくいこともあり、関心をおもちの方に周知していただければありがたい。また本号より広告の掲載も開始した。全国の主要美術館には必ず配布される冊子であり、賛助会員各社をはじめ、広告掲載を希望される企業も多いのではなかろうか。広告掲載の詳細については、事務局まで問い合わせいただきたい。

機関誌部会では『ZENBI』が発行される一月ほど前に部会員が集まり、ほぼ一日をかけて校正の会議を開く。多くの目を通すためであろうか、実はこれまで本誌については誤植やミスプリント等の指摘を受けたことが一度もない。この点は本誌の秘かな誇りである。部会員の皆さんの苦労を多とするとともに、このような後記を付した本号に校正ミスが発生しないことを祈るばかりである。（O）

# 『ZENBI』では、次の要領で広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

［原稿の内容］
・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
・原稿には表題を付してください。

［投稿の資格］
・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
・匿名の投稿は受けつけません。

［投稿に係る詳細］
・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

［締切］
・第 7 号（2015 年 1 月発行予定）に関しては 10 月 31 日、
第 8 号（2015 年 7 月発行予定）については 4 月 30 日を締切とします。（当日必着）

［提出先］
〈メールの場合〉
matuyama@ma7.momak.go.jp

〈郵送の場合〉
〒606-8344　京都市左京区岡崎円勝寺町
京都国立近代美術館内　全国美術館会議機関誌部会
幹事　松山利光

［問い合わせ先］
内容に関する問い合わせは下記に御連絡ください
〒680-0011 鳥取市東町 2-124　鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会
幹事　尾﨑信一郎　E mail: s-osaki@pref.tottori.jp

## ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
(1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
(2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
(3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
(4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否
(1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
(2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について
(1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
(2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
(3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
(4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いがが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について
(1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
(2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他
(1) 原稿料は支払わない。
(2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。